

新刊紹介

山本 隆著

『貧困ガバナンス論—日本と英国』

A5版 / 276頁 / 定価 2,800円+税 / 晃洋書房, 2019年

福地 潮人

中部学院大学人間福祉学部准教授

本書の特徴はガバナンス論である。社会福祉ガバナンス論を専門とする紹介者の視点から何よりも高く評価したいのは、貧困問題の分析にガバナンス論の枠組みを用いていることである。周知の通り、ここ数年で貧困をテーマにした著書は枚挙に暇がないほど数多出版されている。しかしながら、本書のようにガバナンスという視角から貧困問題に深く切り込んだ果敢なる業績は皆無に等しい。ちなみに、ガバナンスという言葉自体は今日でも方々で多用されてはいるものの、それらのいずれもが国際的な議論の状況さえも踏まえられたものではない。当然ながら、語彙の使い方としても適切とはいいがたく、なかには単なるファッション・ワードと勘違いしているのではないかと疑わせるような嘆かわしいものさえもある。その点、本書では、第4章に見る様にガバナンス論発祥の地でもあるイギリスでの議論状況を、簡潔ではあるにせよ、大変分かりやすく説明している。

この点ですでに、学術的に多大な功績と評価できるのだが、本書はさらに踏み込んで、ジョナサン・デービスのネットワーク・ガバナンス批判論にまで言及している。デービスの議論はグラムシ主義に立っており、市民社会を国家と一体のものとして捉える「統合国家論」を基盤にしている。よって、当然のことながら、「市民社会 = NPO = 民主的」などといった気の抜け気味な公式を唱

える楽観論などではない。デービスはガバナンスに加わると想定されている市民社会におけるネットワークについて、むしろ強制を行う国家と一体になって支配層への同意を醸成し得る存在と見ている。これは市民参加型の「協治」を夢想するガバナンス賛美論者には耳の痛いであろうと思われる主張である。が、「市民社会」を自称する団体が市場における利潤の最大化さえ口にして憚らない今日、このような警告を看過するか、本書のように真摯に受け止めるかでは、議論の行く末も当然異なってこよう（看過するのであれば当然、市民社会論は遅かれ早かれ死に至るだろう）。もちろん、こういったデービスの議論を正面から取り上げた議論も、本邦ではこれまで見当たらなかったものである。

本書はデービスの警告を受け止めつつも、ベビアーとローズのいわゆる「3つのR」論を機軸に据えつつ、日英両国の貧困対策の事例を詳細に分析している（こういった理論と実証のバランスの素晴らしさも本書の魅力の一つである）。本書でも述べられているが、「3つのR」論についてベビアーらは、その詳細な内容までは示していなかった。すなわち、理論的な妥当性はあったとしても、十分な実証分析を欠いており、その枠組み自体が果たして現実の政策過程に適用できるのか否か明らかでなかった。それ以前にそもそも、それぞれのR、すなわち支配 (Rule)、合理化

(Rationalisation), 抵抗 (Resistance) が具体的には何を内容としているのか、定義さえ不十分なままであった。本書はそういった、やや舌足らずな印象のあったベビアーらの議論に対して、貧困問題を捉える上での適切性という視点から検証しつつ、新たに統制、合理性、抵抗というファクターから構成される独自の「貧困ガバナンス」概念を編み出している。そして、これを分析枠組みに置きつつ、著者自身が実地のインタビュー調査で得たデータによる綿密な裏付けを行うことを通して、より内容の伴った重厚なモデルへと進化させることに成功している。

貧困問題に対する著者の姿勢は序章における次の一文に明確に示されている。

「貧困削減の政策は、まさに政治の変革を意味することであり、社会運動の高揚を必須とする。」(p. 17)

紹介者はこの一文に強く膝を打った。その通りである！——貧困問題は統治の在り様を決める政治なのである。ガバナンスという言葉にも様々な訳出があるが、これも言い換えれば、権力の編成と配置をめぐる統治の過程である。よって、著者の言う貧困ガバナンスも、貧困問題をめぐる力の編成・配置とそれをめぐって展開される政治のことである。それらの分析を欠いたままでは当然、これに対する社会運動の方略も立案しえないであろう。結果的には、永遠に解決には至らないこと

になってしまう。否、本書の第1章に見る様に、エリザベス救貧法以前の時代から貧困に取り組んできたイギリスでさえ、今もなお保守政権下での緊縮財政の影響で貧困が拡大している。そういった歴史と現状を見る限り、この世界にはむしろ、貧困自体が解決できないことをもって支配の永続化を図ろうとしている層がいるのではないか。そう考えるのは疑いすぎであろうか。

貧困問題はなぜ解決しないのか？——本書は、誰しもが心に思っているこのシンプルな問いへの答えを考える上で、無二の導きの書となろう。ここで読了後の正直な感想を、恥をさらすことを厭わずに述べよう。紹介者は今、著者の溢れんばかりの才への羨望と、僅かばかりの嫉妬に似た感情を抱いている。著者と紹介者の年齢差はちょうど20歳であるが、20年後に果たして著者が目にしているような深淵に到達しえるのであろうか。言いやうのない焦燥感さえ感じている。

最後に、貧困問題が解決しないのは、本書の述べるように政治の変革が起きていないからである。しかしながら、政治を変革するような有力な社会運動が起こっていないことには、私たち研究者にも少なからぬ責任がある。権力に対して必要以上に恐れ慄き、そこにメスを入れるどころか、口さえも閉じようとするならば、それは知識人としての怠慢でもあろう。このことを自覚しつつ、日々研鑽に努めなければなるまい。